

のあつた所だと言ひ伝えるだけである。

※ 昭和・平成と世は移り変わり「鶯巢の池」とそ

の周辺は埋め立てられ、今は住宅や官公署・野球
場になっています。

ことひ 琴弾きの松

蓑江 手塚 隆吉

今から千何百年前の昔、古港の近くに曲がりくねった松があつた。回りは丈余（約三・三メートル）、幹は虹のように屈曲し、枝は四方に垂れ十余間（約二十メートル）も広がり、葉は千年もたったような色でそれが水に映っているのは何とも言えぬ眺めであつたという。

この松から二町位の川上に江月院というお寺があり、更に二町位離れた所に勉造という働き気の青年がいた。この勉造に鈍太という弟がいた。毎日、のらりくらりと遊びまわっているけれど、勉造は別に叱りもせず鈍太が気ままにしているのも知らぬ顔であつた。

ある日、江月院の住職が勉造を訪れて嫁を世話した。その名を松代といって勉造と共に朝は夜の明けぬうちから野良に仕事に行き、夕は星をいただいて帰るいう働き手であつた。松代はまた折々夜に琴を弾いて勉造を慰めた。しかし、松代は琴を弾くときは一室に入って戸を閉め弾く姿を見せなかった。彼女が琴を弾くときは「必ず

見るな」「見ない」という固い約束がされていた。

そのうちに夫婦には玉のような男の子が生まれ松造と名付けられた。そして早くも数年の月日が経った。

勉造の家では、毎年江月院の住職を招いてお茶飲みをすることにしていた。本年も例によって今晚の十五夜に住職を招いてお茶飲みをしようということで勉造は江月院へ行っていた。

その留守^{るす}のときのことである。松造は母に「おかあさん、琴弾いて」とねだった。松代は最初は断っていたが松造の再三の願いに遂に折れ、側にいた鈍太に松造を預け「琴を弾くのは見てはいけませんよ」と念を押して隣の部屋に入ってしまった。松代は部屋に入るには入ったがどうしたものか胸さわぎがして弾く気がしない。何となく気がかりだったが松代は弾き始めた。松造はしばらく聞いているうちに眠ってしまった。鈍太は、「どれちょっとのぞこうか。見るなと言われると見たいものだ」と、抜き足差し足すき間から琴の音の聞こえてくる部屋をのぞいた。その途端、鈍太は急に苦しくなって倒れそして息が切れてしまった。

松代はしおれきって部屋から出てきた。

「胸さわぎがして弾く気になれなかったのはこういうことが起きる知らせであつたのか。あー。苦しい。鈍太さんが息が絶えたのは約束を破ったからで仕方のないこと。しかし、我が子とこれで別れなくてはならないとは悲しいことだ。眠っている松造と話も出来ず別れることは辛い。あ、そうだ。せめて形見に琴の音を裏の松に残しておこう。あー松造よ。お父様を後生大事に助けなさい。もうこれまでだ。さようなら」

松代の姿は消えてしまった。松代は曲がりくねった松の精であつた。

松造は夢からさめてみると母がいないし、鈍太おじさんが倒れている。「お母さん、お母さん、おじさん、おじさん」と言っても何の応答もない。松造は氣もそろにぼう然としているとき、父の勉造が帰ってきた。

「おお、松造どうしたのか」「遅かった、遅かった、お父さん。お母さんはどこに行ったの。おじさんはこれのことおり」

勉造はすべてをのみこんだ。「おお松造、さびしくなっ

たのう」と言いながら手をさしのべて抱き合った。

ちょうどこのとき住職が来てこの有様に驚いたが、「まあせんすべないことだ」と言いお経をよみ松代と鈍太の冥福を祈り、あくる日鈍太の葬儀をていしようにした。

このことがあってから、松の葉に潮風が触れるたびにゆかしい琴の音を出すようになったという。そして誰言うことなくこの松を「琴弾きの松」と呼ぶようになった。それから何百年か経って源重之が日向守に任ぜられ、たまたま高鍋に来てこの松を見て

白波のよりくる糸ををに上げて

風にしらぶる琴弾きの松

という和歌を詠んだといひ伝えられている。その和歌は今なおこの史跡の石碑に刻まれているがそこが松の根元という。

※ この松は、明治二十三年頃の暴風雨に枝を折られ遂に枯死したという。その後松が植えられ今では史跡として蚊口地区の皆さんのお骨折りによって整備されている。



第四部 思い出の部

小丸の二重垣ふたえ（小丸の名前は小本丸こほんまるの意）

―（子供の頃の思い出）―

小丸 神代 勝忠

小丸は、旧藩時代には「小丸小路」といい、戸数としては六十戸ばかりだったが、どの屋敷も大体四百坪前後垣は揃いの錦竹きんちくの生垣いけかき、それが南北の小丸通りの端から端まで整然とつづいていた武家屋敷通りだった。

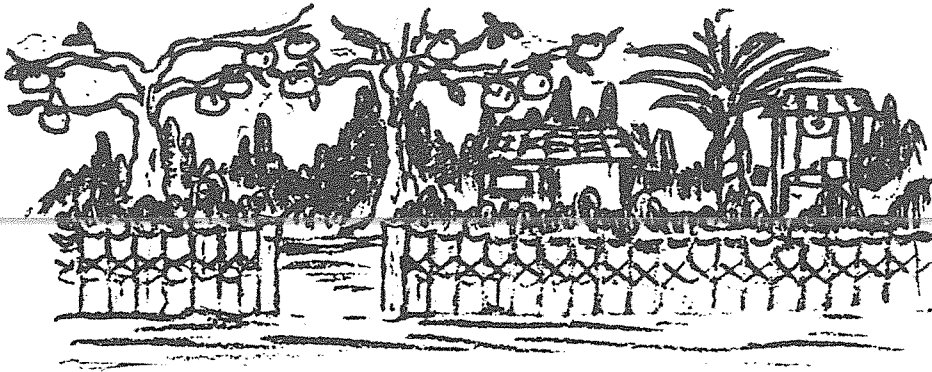
私は代々たまたそこで生れ育った者として、昔の姿を述べておくわけだが「二重垣」というのは、その錦竹の生垣に平行してもう一つの、一メートルぐらい内側に、灌木かんぶ（高くない木のこと）による

内垣があったことで、例えば、さざんかとか、くちなしとか、つつじ、浜ざかきといったそういう類たぐいの木が横一列に内垣として植え込んであったことである。

したがって春は春の、秋には秋の、思い思いの花も咲き、それはそれで美しく心を和ませるものがあったが、かと思うと知らぬ間に木にまつわりついた「のうぜんかずら」がパツと突然大柄な朱色の花びらをなびかせて家人を驚かせることもあったり、ともかくもそれらが四季を告げ、時には楚々そそとして、時には、けんらんとして、門辺を彩いろどってくれた風景を思い出す。

この高鍋の垣根の工夫は、米沢にも及び、米沢ではさらに鷹山公のアイディアが加わって、野菜の少ない雪国の健康食ともなるといふ「うこぎ」の垣となったものである。私は町長当時昭和四十三年五月、米沢からの招待に接し、主賓である種苞公たねもとうこうのお伴をして米沢を訪ねた時、たまたま「うこぎ」の美しい若葉の季節であったので、乞うて「うこぎ」を食味、鷹山公の恩徳にあやかっただとがあった。

高鍋では種茂公・米沢では弟君の鷹山公・この名君やうざんこう



兄弟の藩政ではつねに一つのこと、二つにも三つにも連動するような、いわゆる一石二鳥的配慮に満ちるものばかりであったのである。ただ一用のためにせずであったのだ。例えば米沢では桜も見ただけの桜ではなく、その実は食用として珍重される「さくらんぼ」のとれる「桜桃」であったし、墓石なども横に倒して重ねればそのまま石垣ともなるようにデザインされていたのであった。

さて、以上小丸の二重垣を紹介したが、しかし毎日の庭掃除役の子供達にとつては面倒な二重垣であった。何しろ間隙かんきわずか一メートル位の狭い垣根と垣根との間を、登校前の気のせいしている時に掃くはのだから、庭箒にわほうさの長い柄がどうしてもどちらかにつかえてなかなか掃きにくかったのである。いつもこのために学校へも、遅刻しそふになる。朝はみんな忙しい。泣き声で母にうったえても、母は仕事の手を止めようとせず、「朝寝坊あさねぼうがいかにのよ、あしたからはよう起きなさいよ」と、毎朝叱られたことも今は遠く懐かしい思い出となった。

※ (追記) 小丸六十戸の八〇は今も記憶にあり、いずれ機会を得て書いておこうと思う。

弁財天と龍神の恵み

牛牧 坂本 幸恵

今からおよそ六十年程前ちょうど初夏の頃です。農家ではまさに田植えが始まるうとしていました。ところがどうしたものか、雨が降らず日照りが続き、水が全然なく田植えが出来ないので。農家の人々は、平原の「金刀比羅さん」雲雀山の「ごまさん」等で雨乞いの祈禱きとうを連日行いますが、雨は一向に降りそうにありません。町中大騒ぎですがどうすることも出来ません。

この時、妙本寺(菖蒲池)を開山された初代の牧野上人しやうじん様がおいでになって、

「こりゃあ、どうにかせんといかんのう。わしが祈禱きとうを試みよう」

と、おっしゃるのです。このお坊さんはいへんにお偉いお方で、何でもご祈禱なされると必ず念願がかなえられると言われていました。染山さん(平原の人)と私は大変喜んで、ぜひお願いしますと、お頼みしました。

上人様は「喜んでいただけるならすぐに始めよう。祈



禱する場所でどこかよいところはないかな。
と、おっしゃるのです。

染山さんと私は、話合って、

「谷坂堤の上に、弁財天様のお社がありますが、そこは
いかがなものでしょうか」と申しますと、

「うーむ、あそこはよい場所だ。静かでお祈りするには

格好のところだ。そこに決めよう」

染山さんと私は、道具を持って弁財天様の所に行きました。
ところが、そこには一七、八の女の子が三人病気を
治すために、お籠もりをしていたのです。女の子たちは、
話を聞くと自分達も手伝うといって、寄ってきました。

藪の中から竹を切出して、柱を建てたり、屋根組みを
し、かやで屋根をふき簡単な小屋が出来上がりました。

牧野上人様もお出でになり、いよいよ祈禱が始まりま
した。私ども二人と女の子三人は、お坊さんの後から手
を合せてお祈りしました。

一日目は降りません。二日目もだめでした。三日目の
朝のことです。空がにわかには曇りはじめ、間もなく大粒
の雨がぼつりぼつりと落ちはじめました。私どもは、さ
あ、もう大丈夫だといいながら、ぬれてはいけないうと、
そこをひきあげることにしました。

女の子たちにも帰るようにいいましたが、その中の一
人の子がどうしても聞き入れず、その場に残るといいうの
です。私どもはしかたなくその場に女の子を残して帰り
はじめました。ところが皆が堤の土手^{どて}のところまできま

すと、今まで凄^{すこ}い降りようだった雨がぴたりと止み、空も明るくなってしまったのです。おまけに日も射しはじめました。上人様は、首をかしげられて

「さりゃあ、いかん。雨が止んだ、も一度上ってやりなおしじゃ」

といわれて、一同は元の場に引返したのです。

ところが、社の所までいった時でした。一人残っていた女の子が、私どもをにらみつけ、眼をつりあげて大声を張上げてどなりはじめたのです。

「私は大海からきた八^{はち}大^{だい}竜^{りゅう}王^{おう}という、竜神じゃが、実はこの弁財天が、わざわざ自分のところに来て今日日照りで、干ばつとなり、住民が大変困っている。ぜひ雨を降らせてほしいと言われたので私は雷をつれて、わざわざこの地までやってきたのじゃ。それなのにお前たちは、途中で投げ出して帰るとは何事じゃ。一体全体どうするのか。雨が欲しいのかどうなのじゃあ」

と、髪の毛を逆立^{さかた}て 顔を真赤^{まっか}にして言うのです。その様子をよく見ますと、まさに竜神が少女に乗り移っておられるに違いありません。見るからに神々^{しんじゅう}しく、威^い圧^{あつ}さ

れてしまいそうです。

上人様をはじめ、私ども一同はその場に平伏^{へいふく}しながら「竜神様まことに申し訳^{わけ}ございません。これから早速やりなおすことにいたします。どうぞよろしくお願いいたします」

と、手をつき 額を地面にすりつけて、謝りました。そして一同はまた、必死になって祈禱^{きと}をはじめました。と、それを待っていたように明るかった空が瞬^{またた}く間に真黒になり、それと同時に大粒の雨がすごい勢いで降りはじめ溝という溝には水がとうとうと流れはじめました。そして池には水が満々とたたえられました。おかげで次の日から田植えがはじまり、農民は干ばつの危機から脱したのでした。

※ 後でその女の子に聞きましたが、そんなことを言った覚えは全然ないと言うことでした。

まさに、弁財天様と竜神様の恵みであったのに違いありません。

狐の嫁入り

後小路 上野 誠三

昭和の初め五月頃だったと思います。所要の帰り、坂本坂を半分位降りたとき、はるか右手の青木の上の山中腹に不思議な灯を見付けました。

日没後間もないのに、灯ははっきりと見え、輝きはあまり強くなくちようど提灯ちようちんの明るさ位です。飴玉位あめだまの太さに見えます。まだ人の顔もはっきり見えるのに三キロ向こうの灯がこんなにはっきり見えるのは不思議なことです。

灯は二つが三つ、四つ五つと連なり山の中腹を斜めにゆっくり、時には速く、五つ六つ連なった前方に、スーッと新たに灯の列が伸びたり提灯行列が木立の中を行くような光景です。「これが狐火きつねびだ！」と感付くと頭の毛が一本立ちして薄気味悪うすきみくなり、ただぼうぜん立ちすくみました。

その時です。坂を登ってきた人が「誰だ、そこで何しちよる」と、呼びかけて来ました。私は言葉も出ず、た



だ狐火を指差すと、「狐の嫁入りだ」と、その人はつぶやいて煙草たばこに火をつけた。

とってもおびえている様子ようすで、「狐が人をばかすときは足もとにおるそう。気をつけろよ」

と言って私の側に寄りそってきました。「この坂にも狐が住んでおる。ときには、山の上から石ころをころがすことがある」と言ってくわえた煙草を投げ捨て踏みにじって、また新しいのに火をつけた。

私にも「吸えよ」と言っ一本くれました。「狐は、煙草がきらいだ。これを吸っておれば化かされはしない」と私に勇気づけるかのように言いました。

そのうちに狐火も見えなくなり、男の人は名乗りもせず立ち去りました。

鳴野橋しぎのばし

鳴野 森 仲吉

明治時代には大明神社てめいじんさの下の小川に人だけ通れる板の橋があった。

この小川は、蛸たきの口堤が水源で多くの水稻を育て、残り水が排水路となったものと、檜谷ひのやにの堤から出た排水が合流したものであってこの橋を「デメジン橋」と呼んでいた。

この橋を渡ると小道が真米まこめまで五百メートル位続いていた。私達が小学校（持田分教場）に通った道でもある。その道のすぐ南側には小川が流れていて、「カガツノソコ」といって深い淵があり、そこには「カップ」が住んでいるといわれていた。また、道の北側に、「モリヤボ」といって大木が二十本位密生したところがあり、「ナベノフタ」が下がると評判の、昼もさびしい小道で晩ともなれば一人も通らなかった。

「デメジン橋」を渡って四十メートル位行くと、「ハチケン橋」があった。この橋も板の橋であった。この小川

は檜谷の堤の排水路と勝利の南側（現在の公民館附近）の二つの大きな深い池からの流れが合流していた。（この池は現在は埋立てられているが、当時は水量も多く深くカップが住んでいるといわれていた）

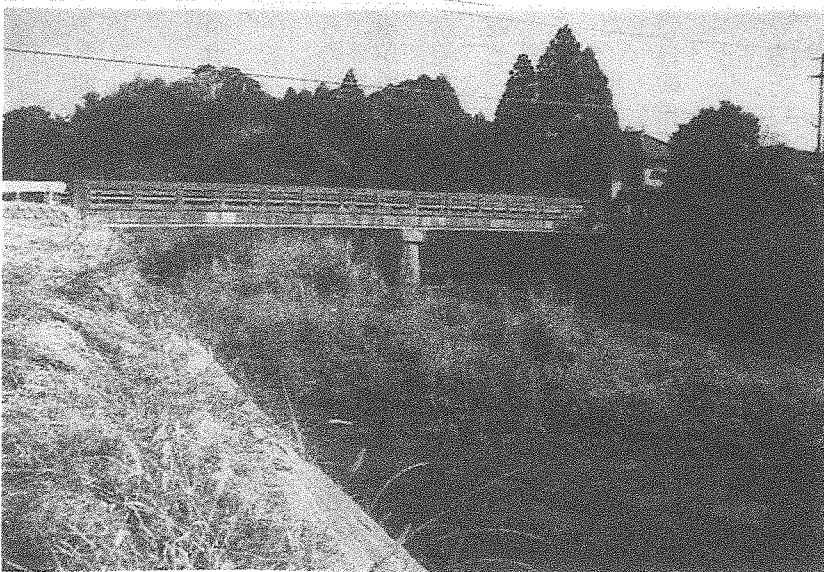
この橋を渡って細い小道を南の方向に約一キロメートル程行くと小丸川の渡し舟があり、それで稲荷神社の下に着きそこから高鍋の町に行ったものである。

この「デメジン橋」と「ハチケン橋」の周辺は「塩入り」といって満潮になると海水が小川に溢れた。時には水田に入って稲を枯らしたこともあった。台風の際は満水して二つの橋は流され通行不能になることもあった。

上江村の橋口斌興村長時代に、国・県の補助事業として「デメジン橋」と「ハチケン橋」を一緒にした「鳴野橋」が完成した。その頃は鳴野には荷馬車は少なく馬の背で荷物を運搬する程度であったので、当時としては驚く程広く長い立派な橋であった。だんだん交通量も多くなり便利がよいのでみんな喜んで通っていた。

しかし、この鳴野橋も木造のため年数が経つにしたがって修理も出来なくなり、昭和三十年末には通行に危

険な状態になった。そこで地区では「鳴野橋建設委員会」を設け、高鍋町に橋改築の陳情を行い、昭和四十二年神代勝忠町長の時に一二八六万円で鳴野橋は永久橋に姿を換え現在に至っている。



鳴野橋

が永久橋になって交通状態もよくなり郷土の発展につながった。また、小丸川の堤防が完成され鳴野川の水門が出来、道路は一

層完備された。水門が建設される場合も水門の道幅を消防車が通行できるような設計をと建設省に陳情して現在のものとなった。

嶋野橋は、世の移り変わり発展につけ土橋・板の橋・永久橋と変わってきたが、その時代時代の人々が建設に当って非常な苦勞と困難を克服され完成されたことを思い感慨にたえない。

片桐製糸工場

中尾 加地 ナミ

現在高鍋町役場のある所に製糸工場がありました。

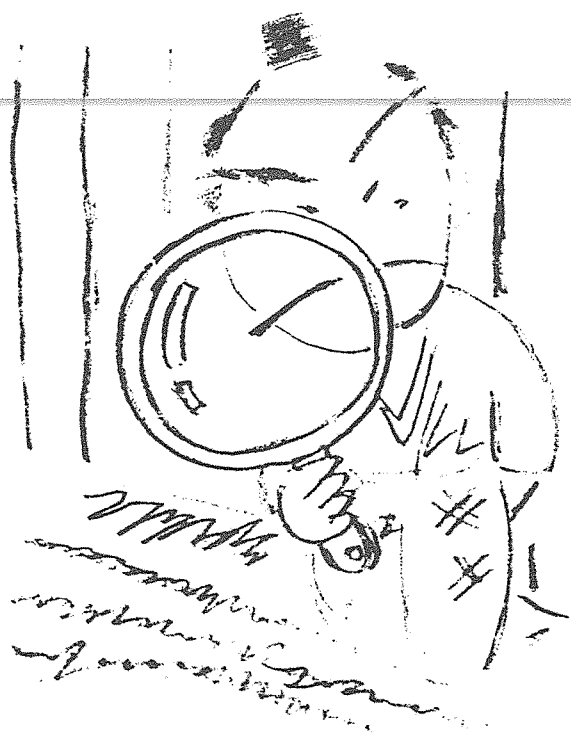
私は、都城で生まれ十四歳の春大分の製糸工場に入社、昭和五年まで勤め、十九歳の春六年間の「皆勤賞」をもらい、その後高鍋の片桐製糸工場に入社しました。

大分で働いていた女子工員さん三十人余りが片桐社長さんに連れられて高月に來たのです。

高鍋の工場では、朝六時から夕方六時までの仕事でした。お昼の食事の時、休憩があったが、そのほかは休む間もない程でした。

朝工場の仕事場に入ると、まゆをほぐすための蒸気が通って冬でも暖かでした。一人ひとり持ち台が定めてあって、片手桶だけが五個置いてあり、炊いたまゆがはいっていました。

まず、わらのしんで作った刷毛でばわばわしている「けば」をきれいに取り、一個のまゆから一本の糸が出るようになったら、それを五本ずつ小さい輪の仲に通し、か



せに巻きつけました。そして、巻取機のモーターのスイッチを入れると、五本が一本の糸になってきれいに^棒に巻かれていく。桶のまゆが全部終わったらい棒が出来上りでした。

そんな機械を一人で五台受け持たなければならない。まゆの糸がもつれて、六本七本出ることもあると機械を止めて五本にしないといけません。やっと五台がきれい

に上りだしたと油断して隣とおしゃべりなんかしていると小さくなったり太くなったりできれいな糸が出来ない。そうすると、一人ひとりに番号がついていて呼び出されてしかられる。検査係がいつも虫めがねを持って見て歩いていて、悪いのが見つかるというほど足を踏みつけられました。

まゆ桶があくと少年工員さんが桶を取り替えていく。その桶が多くなるほど給料が高くなるという仕組みでした。

その頃の給料は、最高で十九円、下の方は分かりませんが、まゆ桶がなかなかあかない人もあるし、糸が思うように上らない人もあり年少者はかわいそうでした。

別な部屋では「かせぐり」をしているおばさん達もいました。まゆを^ま升に入れ同じ分量に計り、片手桶に入れてベルトコンベヤーで蒸気室に送る。そんな仕事もありました。

女子工員さんの制服は、上は着物下は袴^{はかま}で、初めは木綿^{めん}だったのがだんだん良くなってモスリンや毛のものになり女学生みたいでした。夜は九時が消灯でそれまでは

自分の好きな事ができて楽しい時間でした。でも今のよう
に音楽を聞いたりテレビをみたりではなく裁縫^{さいほう}などを
していました。

会社では年に数回にわたり、良い製品を作った者に褒^ほ
美^びとして浴衣^{ゆい}やいろいろな賞品が出ました。私はもらっ
た賞品で年下の女子工員さん達に浴衣を縫^{ぬい}ってあげて喜
んでもらったものでした。

苦しいことも楽しいこともあった会社時代ですが、母
が亡くなったため会社をやめました。それから三年して
(昭和十年) 高月の製糸工場は廃社となりました。

弾とまむしとひょうすんぼ

筏 石井 正敏

私は、祖母のオイソから、習吉じいさん(オイソの夫)
の若い頃の話进行いろいろと聞かせてもらいましたが、次
の話は特に印象深く記憶^{きおく}に残っています。

西南^{せいなん}の役^{やく}では、高鍋^{たかかき}地方からは薩軍^{さつぐん}として最初に二個
小隊二百名が参加しました。その中の第一小隊長が習吉
じいさんでした。習吉じいさんは写真で見ると背は高く、
骨格^{こつかく}も隆隆^{りゅうりゅう}、おまけに鼻^{はな}ひげをはやし頑丈^{がんじょう}そうですが、
とてもやさしい目をしています。

その習吉じいさん達は、当時のことなので車はなく高
鍋^{たかかき}から徒歩^{とほ}で小林^{こばやし}を経て熊本まで行き、熊本城の攻撃に
参加することになりました。(高鍋^{たかかき}へ熊本に一週間を要
している)

そして、官軍の応援が熊本に来るので、習吉
じいさんの隊は田原坂で官軍を迎えうつことになりました。
薩軍と官軍との田原坂の戦は今も話に残る程激しいもの
で大変なものだったということです。

習吉じいさんも、銃弾雨あられと飛んで来る中で戦ったそうですが、一発の銃弾が不幸にも左手に当たり負傷してしまいました。習吉じいさんは応急手当をし、歯をくいしばり痛いのをこらえて戦い続け、その後入院治療を受けました。そして数日後、再び戦に参加したとい

います。
やがて戦争も終わり、習吉じいさんが高鍋に帰り暮らしていたある日のことです。

山の中を歩いているとき、習吉じいさんは樹上から落ちてきた「ひも」が右肩に巻きついたようだと思った途端、右肩に鋭い痛みを覚えました。「mamushi」でした。

習吉じいさんは歯をくいしばり、mamushiを払いのけ、腰の短刀をさっと抜いて右肩の噛まれた傷口をえぐり取り、毒のまわりを防ぎました。そして「木の上にも敵がおったか。田原坂の時は左手を、今度は右肩じゃどん、mamushiの方が痛か」といつて笑っていたそうです。このすばやい決断・処置によって、習吉じいさんは命を取り止めることができたのです。

それにしても、生身の体に刀を当てるとは習吉じいさ

んは余程の氣丈夫だったといえましょう。

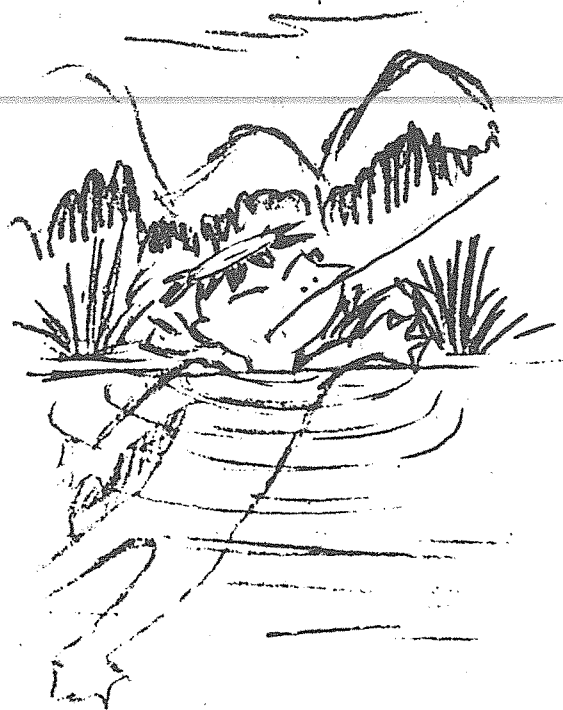
こんな習吉じいさんに次のような話があります。習吉じいさんは釣りが好きでよく宮田川に「うなぎ釣り」にでかけたそうです。

ある日、いつものように仕掛けを入れていると、グッと糸を引いたので「こりゃ、大物じゃぞ」と、竿を力いっぱい持ち上げました。しかし獲物は上がってくるどころか引きずりこまれるばかりです。大男の習吉じいさんも、汗を流し流し踏んばって大物との戦に挑みま

した。
しかし、全く事態は進まず時間は経つばかりです。そのとき、川の土手を通りかかった人がじっとこの様子を見ていましたが、「この辺りにゃ、ひょうすんぼがおりゃんすばい。そっじゃねえですかいの」と大声で言いました。

これを聞いた途端、習吉じいさんは手から釣竿を投げ出し、籠をけとばし翔ぶが如く家の方へと走り出しました。

習吉じいさんのやさしい目は、恐しさのため異様に輝



火の玉あれこれ

青木 酒井 暁

今の人には経験しようにも出来ないことでしようが、昔はよくいろんな人がいろんな場所で火の玉に出会ったという話があります。かくいう私も火の玉については次のように見たり聞いたたりしています。

私は妻の父と小丸川の青木下へ投網を持ち鮎取りによく出かけたものでした。ある晩二・三度漁をしていると国光原から大きな火の玉が鬼ヶ久保の方へ飛んでいくのが見えました。川面が明るくなるほどの光でびっくりしました。落ち着いて父は舟を左岸に止め煙草に火をつけ三年ばかり前の出来事を次のように話してくれました。

当時、高鍋は養蚕ようさが盛んで至る所に蚕しりようの飼料にする桑畑がありました。小丸川の向こうの五郎丸字にもたくさん桑がうえられ五月末になると桑の木切りに養蚕の人びとは忙しい毎日でありました。父が経験したのはちょうどその頃だそうです。

き、大男に似ずあわてふためき逃げる様は、常日頃を知る村人達の目に「余程のことが起こったぞ」とうつりました。後で、ひょうすんぼを釣った怖さで逃げたと聞き「鉄砲の弾とマムシにも強かった習吉さんにも怖いもんがあったげな」と村中の評判になったということです。

その後、子どもたちが川に長くつかっていてなかなかあがらないときなど、「習吉じいさんのヒョウスンボがくっど」と言えば、子供たちはたちまち水からあがったということです。

父が桑の木を切っていると、夕方青木の近くの若者が

二人同じく桑の木切りに馬一頭ずつを引いてきたのです。一頭に六束負わすので荷が出来たときには薄暗くなっていました。三人は急いで馬に荷を負わせて帰途につきましたが、五月頃のこととて小丸川はかなりの深さがあり渡るのに苦労したということです。（当時は今のようには橋もなく川を渡る時は浅瀬を見つけ尻からげて渡るしかありませんでした）川の中頃まで渡った時です。

北の国光原の方が急に明るくなったのでヒョイと振り返ってみると大きな火の玉ではありませんか。若者の一人は、

「川を渡ち帰つとに火の玉が来てくるっといつよね。明かりっじゃが」

もう一人も

「じゃがじゃが、ちょうちんもいらんごつ」

と互いに冗談を言い言い渡っていました。ところがです。若者の話が火の玉に聞こえたように火の玉が若者達の方へまっしぐら……さあ大変 馬は驚き尻尾を後足の間に突っ込み走り出しました。若者達は必死で自分の馬の手綱たづなを握りしめ

「火の玉どん 火の玉どん 許してくれ……」

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ 南無阿弥陀仏………」

と唱えました。火の玉は頭の上をぐるぐる回り生きた心地こころはありませんでした。

川原を駆け、坂を登り我が家に帰っても、若者達はものも言えず、家の人たちから

「どしたっか おまえどま」

と、聞かれても目を見開き口をもぐもぐさせているばかりでその驚きぶりは大変なものだったそうです。

次は私が十才の頃（大正の末期）の話です。

春先の農家ではもう蚕飼育かいいくの準備にかかっており用具の消毒作業に追われる多忙な頃でした。ちょうどこの頃の私の集落に住む若いお嫁さんが事故で急死しました。

そのお嫁さんの悲しい声は耳に残りかわいそうでなりませんでした。

次の日、朝早くから集落中から沢山の人びとが出て野辺の送りの準備にかかりました。私も雑役係りとして、竹を切ったり、のぼりをつくったりしたのを覚えています。

若い人の急死だったので葬儀は何かと手間取り出棺は夜になりました。家から墓場まで一、〇〇〇メートル位行列が静静と進んでいった様子は今でもはつきり焼き付いています。私は道端で何人かの人々とお葬式を見送りました。

行列がちょうど墓に着こうとしたことです。行列が出発した家の方が急に明るくなりました。

「何だろう」

と見ると、なんと火の玉です。火の玉がボォーと青白い光を出し、尾を引いて行列を追いつ越し墓の方へ飛んできました。

野辺の送りの途中の皆は、その火の玉の大きさ、明るさにびっくり、たじろぎましたが、逃げ帰るわけにもいかず、ただただわが身の無事を祈るばかり、やっと墓前でとむの弔いを終え帰ったのでした。

私は、前日のお嫁さんの悲しい声と、火の玉の恐ろしさが混じり合い一晩中とうとう眠れませんでした。

火の玉二題

三嶋 敏

地区の集まりがあり、昔の話になるとその中にきつと火玉が出て来ます。墓、山、畑等に出て来る火玉いろいろですが、ここではお二人の経験を聞き取り紹介いたします。

(一) 川田の中村博さんの経験の火玉

学校に忘れものをしたので、兄と一緒に取りに行きました。年の瀬も近づいた寒い夜で、月もなく、暗い夜道を兄と二人で帰途につきましたが、昔のことで、道路はもちろん舗装されて居らず、石ころのごろごろとした狭い道でした。夜ともなれば外を歩く人影とてありませんでした。

川田のはずれには瓦を焼く小さな工場があつて、その向こうには、綾部と云う人が住んでいたあばら屋がありました。草ぼうぼうで、枯薄^{かれすす}が風に音をたて、うす気味悪いところでした。そのあばら屋の裏から音もなく、すうっと火玉が出て来ました。

あたりは急に明るくなりました。驚きのあまり、ぼう然として明るい空をながめ、付近のたんぼを見渡すと、田んぼもあぜ道も昼のようにはっきりと見えるほどでした。

火玉は、はじめ上下に揺れ動いていましたが、そのうちに水平に動きはじめ、徐々に速度をつけて、サササッと音をたてて走りはじめました。その形はちょうどあの魔法つかいの老女が乗って空をかけめぐるほうきに似ていました。

やがて、その火玉は、川田から馬場原、中島とそこら中を縦横^{しゅうおう}無尽^{むじん}に駆け廻りその恐ろしいこと、心臓も止まる思いでした。兄は、いつの間にか居なくなっていました。私が一人ただ子供心に何ものであるかと思議さを感じ火玉を見つめていました。

突如スーッとその火玉は、音もなく消えてしまい、あたりは真暗やみになってしまい、ただ一つ小森さんの家の鈍い電灯が見えるだけでした。やっと我にかえて救われた気持ちになって家路を急ぎました。

火玉を経験したのは、これが最初で最後でした。

(二) 川田の黒木幸子さんの見た火玉

小丸川も近年河川改修工事が行われて、ずい分様子が変わってしまいました。青木の下は、そのむかし五郎丸川原といって、荒地を拓いて畑にして落花生や芋類を栽培していました。その向こうはこさん竹や松林などがあり変化に飛んだ風情のある所でしたが、それらは現在川底になってしまつて昔の面影は、なくなつてしまいました。

竹鳩のもぐり橋からこのあたりにかけては、私も父や大人・友達とよく釣りに出掛けました。十センチ余りの若鮎が毛針で面白いように釣れました。ある夕方のことその日もよく釣れるので、夢中になつて釣っていました。ふと気がつくと、あたりは暗くなっていました。父達はいつの間に帰つたのか、残つたのは広瀬さんと私の二人だけになっていました。

心細くなつて周囲を見わたしていると、遙か坂本坂の中ほどに火の玉が現れました。そして上下に揺れ動いていると見るうちに、こちらの方に移動して来るではありませんか、そして川に沿つて近づいて来ます。だんだん

速度をつけて、川面を真紅に染めてすぐ傍にやつて来ました。驚きと恐ろしさで声も出ず、わなわなと震えながら広瀬さんと手を握り合つて、後も見ずに駆け出しました。

家路を急ぐ道の遠いこと、息をきらして死にものぐるいで、やっとの思いで帰りつきましたがあの恐ろしかった事は忘れることができません。

火 玉

道具小路南 松岡 美也

其の一

ある初夏の夜、母が町の立光呉服店へ買物に行くのについて行った時のことです。

買物を済ませて家に帰ろうとし横町の町はずれに出た時、母が「あら、二本松の上ん火は何の火じゃろかいね。あすこ辺に明りが付いちよるはずはないしね」といって早や足に歩き始めました。当時私は七・八歳位だったでしょうか。

たんぼ道の中程位に来た時母が「だんだん こっちさね近寄って来るごつあるもんね」といいました。私も「ほんとじゃ」とは思ったのですが、子供のことでとて別に気にもしていませんでした。

ところが母は「急げ雨が降り出すといかんかり急げ」としきりに言うので小走りについて帰りました。

帰ってからの母の話に「だんだんと火が近寄って来る気配がするので気味悪くなり火を見ないようにして急

いだ」のだそうです。道具小路の村の入口近くに來たとき、ふと見たらだいぶ近くて田の面が明るくなっていたので怖くなり、でも私に教えると騒ぎ出すと思ったので、雨は降りそうにもないのに「雨が降り出すと困るから急げ急げ」と言ったのだそうです。

